

解 答

問一	a 用途	b 胴体	c 朗読	d とも「す」
問二	A イ	B ア	C エ	D ウ
問三	ウ			
問四				
問五				
問六				
問七				
問八				

マッチ箱の象の絵

いくら子供を乗せてもシーソーが動く気配を見せないことに対しての、象のあせりやいらだち、その場の緊張。マッチを擦って誰よりも上手に綺麗な火を点すこと。

いくら子供を乗せてもシーソーが動く気配を見せないことに對しての、象のあせりやいらだち、その場の緊張。

全く「断念」しないでいられる人生などないのに、「断念」に伴う悩みや葛藤を受け入れられないから。

弱者への思いやりや共感
着実な努力をする態度

断念させるべきことは、断念させること

子どもを無条件に愛してあげること（子どもを全体対象として認識すること）

子どものときに失敗を克服し、乗り越えていく体験を積み重ねておかないと、その後に学ぶのは難しいから。
自立

解説

出典は、小川洋子「ミーナの行進」。

問一 「用途」「点す」などといった、中学入試用問題集では網羅しきれない出題が例年見られます。普段から新聞を読

むなどして、語彙を豊かにしておきたいところです。

問二 A 直後に「高級な外國製品が入っていたに違いない」とあります。こうした推量表現には「さぞかし」をつけます。B 直後の「子供が喜びそうな」を強調する、「いかにも」という、まさにそのとおりだという意味表す言葉がります。C 直前に「草原の子供たちは皆優しかったので」とあるので、「すぐさま」「承知してくれました」という文脈にするのが適切です。D 前後に注目しましょう。「次々と子供たちはシーソーに乗せられていました」という内容を受け、「彼らは不安になつてきました」とあるので、時間経過とともに少しづつ変化、進行するさまを表す「じだいに」が適切です。

問三 ベッドの下に隠されていた“マッチ箱の箱”は、ミーナにとって大切な秘密です。その大切な秘密を「私」が見て、つまらないなどと言つたらどうしよう。そうした不安から、ためらいがちに「もしよかつたら、だけど」などと言つているのです。

問四 傍線⑥の直後に「ミーナが愛したのはマッチ箱に描かれた絵だった」とあるので、ミーナが見て欲しかったものは「マッチ箱の絵」だと分かります。そこには象の絵が描かれていましたから、そのことも答えに盛り込みましょう。

問五 直後の段落で「昆虫採集の標本」を取り上げ、「マッチ箱もそんな昆虫たちのように見えた」としていますから、ここでの「静かな空氣」は「標本」と「マッチ箱」に共通する空氣でなくてはいけません。両者ともに、「見られる」ことを待つてそこに存在しているものですから、エが適切です。

問六 とてもなく重い象がシーソーの片側に乗つてるので、子供が懸命にお尻を踏ん張つてみてもたいして効果がなかつたのです。努力や援助が少なくて何の役にも立たないことをたとえる「焼け石に水」が適切です。

問七 直前に「象は悲しみました。自分が乗つた途端、凍りついたようにぴくりとも動かなくなつてしまつたのですから、原因は自分以外にないと悟りました」とありますから、自分の重さのせいで楽しいシーソー遊びができず、象は情けない気持ちでいっぱいだったのだとうかります。

問八 象は何とかシーソー遊びがしたくて、次々と子供たちをシーソーに乗せていきます。しかし乗せても乗せてもシーソーは動く気配を見せせず、なおムキになつて象は子供たちをシーソーに乗せつけます。そうした象の焦る気持ち

ちやいらだつ気持ちが「牙が上を向き」という表現に表れてています。そして、ムキになる象のいらだつ雰囲気に不安を覚え始めた子供たちの気持ちや、その場のただならぬ緊張感が「(牙が)きりっと光りました」という表現に表されています。

問九 ミーナは「夢中になってマッチ箱を集め」ますが、それは、「マッチ箱に描かれた絵」に素敵な物語を見出すことが楽しかったからであり、「火を点すのが好きだったからではな」かったのです。ですから、ミーナが「誰よりも上手に綺麗な火を点せる」のは、結果としてそうなったに過ぎず、マッチを擦って上手に火を点すことが、マッチ箱収集の目的ではなかつたということです。

出典は、片田珠美「十億総ガキ社会『成熟拒否』という病」。

問一 部首や画数の問題は、この学校では過去にも何回か見られています。しつかり対策しておきましょう。

問二 傍線①のすぐ前の「それに伴う悩みや葛藤を受け入れられないから」が答えの核となります。ただしこれだけでは、なぜ「自分が断念に伴う悩みや葛藤を受け入れられないから」が答えの核となります。ただしこれだけでは、なぜ「自分がだけ」という「被害者意識」につながるかに答えていませんし、「本文全体を踏まえて」という設問条件も満たしていないません。自分だけひどい目に遭っていると思うのは「断念し、そこからはい上がる」という経験を子供の頃から積み上げていないうちが原因です。そのことについては本文後半で主に述べられています。断念した経験のない者は、そうした断念などめずらしいことではなく、誰でも経験することだということが分かりません。だから、断念せざるをえなくなつたとき、なぜ自分だけ辛い目に遭わなくてはいけないかと被害者意識を持ち、その理不尽さを他人にぶつけくなってしまうのです。

問三 空欄Aのすぐ前に注目しましょう。「敗者への思いやりや弱者への共感を持つてゐるようにもなる。また、：着実な努力」というものができるようになる」とありますから、「ここで答えるべき」なのは「敗者への思いやりや弱者への共感」と「着実な努力」だと分かれます。後は、字数制限に合わせることと、答え方に注意してください。まず「敗者への思いやりや弱者への共感」は字数オーバーです。「敗者」と「弱者」は、「弱者」の方が上位表現ですから、「弱者への思いやりや共感」とまとめましょう。また「着実な努力」の方は、何が身につきますかという問い合わせに対する答え方としては不適切なので、「着実な努力をする態度」「着実な努力をする姿勢」などと答えましょう。

問四 断念する経験を積み重ねると、物事は何でも自分の思い通りになるというわけではないということが分かつてきます。つまり「だめなものはだめ」という、ものの道理を学んでいくのです。

問五 直前の二つの段落に着目しましょう。親は子供に「断念させることは断念させること」、そしてその前提条件として「子どもを無条件に愛してあげること」、といった二つの事柄が提案されています。この二つが、今や逆転してしまい、子供を「断念させない一方で、：条件付きの愛しか抱けない」くなつている親が多くなつてしているのです。

問六 「B」対象」という表現は、直前の段落の「子供を全体対象として認識すること：」という内容を受けたものです。「全体」の対義語である「部分」を入れましょう。

問七 親が過保護・過干渉だと、子供は「転んで起き上がる経験を積み重ねる」ことができず、したがつて「失敗したとき、どうやって克服し、乗り越えていけばいいのかを、身をもつて体験する」こともできません。そうして大人になつたらどうなるでしょう。傍線④の後を読むと、失敗の経験は「早いほうがいい」と書かれています。「やり直しがきくから」です。ということはつまり、やり直しがきかない大人になつてしまつてから失敗を繰り返しても、それはマイナスばかりで、人としての成長にはつながらず、そのまま「年だけ取」つていくこととなるのです。

問八 「反抗期」は、自らの欲望を持ち、それを押し通そうとする思いが強くなつたときに起こるようです。親の言いなりにならず、親から「自立」しようという思いの表れと見ることができます。したがつて、「反抗期のない子ども」は、親の言いなりとなる、「自立」心の乏しい子供ということができます。